

# 25 journal

society&business Tokyo25 journal

執筆協力 編集室システムU okamura.nobuyoshi@gmail.com

橋本弘山羽村市長が2月21日、石川酒造(福生市熊川)を訪れ、羽村産の米と水を使って醸造した日本酒「はむら」の出来具合を見聞した。同市観光協会の副会長で、農業を営み、米を提供する清水亮一さんが同行した。



杜氏の前迫さんから製造過程について説明を受けた

## 日本酒「はむら」フルーティーに熟成

### 市長が出来具合を見聞



權入れを行う橋本市長

「羽村の新しい特産品を」と始まった酒造りは5年目を迎えた。市内を流れる多摩川の伏流水「はむらの水」

造に委託し、生産している。市内の酒店で販売するほか、4年前から同市のふるさと納税品としても扱っている。「羽村の米が欲しい」という声も多く聞くようになった。羽村の米で特産品を作り、多摩川最上流の水田を守っていききたい」と期待を込める。

今年もコシヒカリ1トンを使い、杜氏の前迫一さんが、「粘りが弱く、さっぱりしている羽村産コシヒカリのポテンシャルを引き出す酵母」を使い醸造したという。「マスカットや青リンゴ、バナナのようなコシヒカリならではの香りが特徴」とも。

当日、橋本市長は石川彌八郎社長と前迫さんの案内で蔵を見学。日本酒「はむら」が熟成するタンクをのぞき、もろみの香りを感じ、權入れを行った。橋本市長は「フルーティな香りがいい。早く飲んでみたい。現場を見て良かった」と話

す。清水さんは「日本酒『はむら』が知られ、『羽村の米が欲しい』という声も多く聞くようになった。羽村の米で特産品を作り、多摩川最上流の水田を守っていききたい」と期待を込める。

酒造り談義にも花が咲き、「羽村産のホップ、ビール麦、水でビールを造りたい」「羽村の米で焼酎造りにも挑戦したい」などの展望も語られた。ビールは既に麦を除いて羽村産のホップと水で2度造り、すぐに完売したという。米焼酎造りは焼酎特区の制度を使って実現できないかと模索している。

日本酒「はむら」は3月初めに搾り、四号瓶(720ミリリットル)で1300本余りを製造。3分の1を生酒で出荷し、3月23日に始まる「はむら花と水のまつり2024」や市内の酒販店で販売。残り火入れを行い、酵母の香りをより引き立たせ秋に出荷する。価格は1760円。

## 南秋留小・飯田さんが一日税務署長に

### 「税が身近に感じられれば大事さ伝わるのでは」

所得税などの確定申告が全国の税務署で行われる中、青梅法人会女性部会が主催する税に関する「絵はがきコンクール」で「青梅税務署長賞」を受賞したあきる野市南秋留小学校6年の飯田美織さんが3月1日、同署で一日税務署長を務めた。



一日税務署長を務めた飯田さん(前列中央)と鈴木署長(同右から2人目)ら

この後、両親の崇之さん・真弓さんと共に訪れた飯田さんは、青梅税務署の鈴木俊次署長から一日税務署長に任命された。委嘱状を受け取った飯田さんは、一日税務署長のたすきをかけて出席者と

るよう明るい色を使った。税金がどこで描いた。税金がどこで描いた。税金がどこで描いた。

## 生理の貧困と向き合う 子ども支援団体に生理用品贈る

女性奉仕団「国際ソロプチミスト青梅」が「国際女性デー」の3月8日、女兒の健やかな成長を支援しよう」と段ボール箱10個分の生理用ナプキンなどを青梅市などの子ども支援団体に贈った。



寄贈式に出席した会員と子ども支援団体の皆さん

で行われた。会長の松永初音さん、小峰三枝子さんから会員5人が出席し、青梅市子ども関連NPO連絡協議会の白井順子さん(青梅子ども未来)、林由佳里さん(子ども劇場西多摩)、福生市のみんなの食堂ママごはんの高橋由美子さんに生理用品を手渡した。

「真心の品物が必要な人にしっかり届けていきたい」と感謝した。生理の貧困が社会問題となっていることを踏まえ、ソロプチミスト青梅は2022年度から贈呈事業を続けており、今年で3回目。生理用品の購入費はチャリティー活動やバザーなどの収益金、会費などで賄った。

今年5日には多摩地域の9つのソロプチミストの主催で木山裕策さんのチャリティーコンサートを国分寺市で開催し、成功させた。